公財団法人 高知県国際交流協会

2015 世界の笑顔集まれ

WINDOW

▼ 岡山 萌美元隊員（2011年～2013年 モンゴル派遣）

▼ 安光 正佳隊員（2013年～2015年 ガボン派遣中）

▲ 村上 野志夫元隊員（2011年～2013年 タンザニア派遣）

▲ 西村 優美元隊員（2007年～2009年 モンゴル派遣）

2015
Autumn
No.63

特集 青年海外協力隊発足50周年を迎えて

- 当協会の実施事業のご紹介
- 中四国初！公立高校への国際バカロレアの導入に向けて
- A Letter From Abroad
  森　温子（青年海外協力隊員・フィジー派遣中）
- 多言語減災プロジェクトin高知
- INFORMATION BOARD
  高知県海外技術研修員のご紹介
  国際ふれあい広場2015開催のご案内
  異文化理解講座開催のご案内

登録語学ボランティアを対象とした翻訳技能研修を開催しました

2015年1月、登録語学ボランティアのスキル向上に役立てていただく目的で、申し込みのあった26名を対象に、金城学院大学（愛知県）の河原清志先生をお迎えし、翻訳の基礎理論と観光ガイドブックを題材にした翻訳演習をテーマに研修会を開催しました。

まず、翻訳の基礎理論として、「翻訳とは何か？」、「英文和訳との違い」、「翻訳で考慮すべき要素」についてご講義いただきました。「日本語はズームイン、英語はズームアウト（英語は結論の部分から書くということ）」や英文和訳は学生が英文法を理解していることを証明するための訳であり、翻訳は文化や状況に即して大胆に意訳せざるを得ない場合があること、などが受講者にとって大いに参考となったようです。

翻訳演習では、愛知県の観光ガイドブックを題材に受講者は翻訳に挑戦しました。「金の鯱」、「三英傑」については、直訳しても外国人観光客に伝わらないので、いかに情報を追加するかについて、グループワークを通して理解を深めました。

最後に観光パンフレットを複数言語で収集し比較対照する等、自宅で出来る翻訳の勉強方法をご紹介いただき研修終了となりました。27年度も登録語学ボランティアを対象とした研修会を開催する予定です（開催時期は未定）ので、奮ってご参加ください。

ジュニア国際大学を開催しました

県内小学生の国際理解と海外との繋がりについて理解を深めてもらうことを目的に、今年も6月27日（土）にいの町にある県立青少年の家でジュニア国際大学を開催し、27名の4年生～6年生の小学生が参加してくれました。

午前は小学校で国際理解教育を進める任意団体「国際理解の風を創る会」所属の若木和香先生から「身近なものの中から世界を感じよう!」というテーマで授業が行われました。

世界地図上に付箋を貼る子供たち

予め準備しておいた身近な物を手に取り製造国を調べ、世界地図に物の名前を書いた付箋をその製造国上に貼っていくと、東アジアの国々にその大部分が貼られました。子供たちはアジアの国々との繋がりが強いことを感じ取ったようです。

午後の県内在住外国人の母国の子供たちがする遊びをその国の言葉で一緒になってする授業は、今年は米国・中国・韓国の県国際交流員とネパール・アルメニアの高知工科大学の留学生にご協力いただきました。5年生から英語が始まっていることもあって米国の遊びでは自己紹介からMy name is ○○と英語で行われていました。

最後はJICA（独立行政法人国際協力機構）職員の杉尾智子先生による約5分間のDVDの視聴を通して平和について考える授業でした。

ケニアのある部族がライオンによって仕留められた獲物の一部をライオンが獲物から離れた隙に切り取っていく映像を見た後、5人程度のグループに分かれ映像の趣旨について話し合いました。その結果、子供たちの共通した意見は、生き物の命を大切にするということでした。1回のみの視聴で良く観察し意見発表までできたことに我々も感心しきりでした。

ネパールの遊び「どのくらい水？」

中四国初!

公立高校への国際バカロレアの導入に向けて

大学や高等学校を取り巻く状況の変化

経済や社会のグローバル化が急速に進む中、自ら学び、自ら考える力が求められており、小中高大においても、児童生徒の思考力や表現力を高めるアクティブラーニング(生徒の能動的な学習)をより導入していくことが求められています。

国は、このアクティブラーニングを中心に取り組んでいる国際バカロレア(IB)という教育プログラムを高く評価しており、2020年までにIB認定校を200校にするという方針を掲げています。また、2020年度入試からセンター試験を廃止するなどの大学入試改革も進められています。

国際バカロレア(International Baccalaureate「IB」)とは

IBとは、国際バカロレア機構(本部ジュネーブ)が提供する、国際的な視野を持った人材を育成するための教育プログラムで、初等教育プログラム(PYP;3〜12才)や中等教育プログラム(MYP;13〜16才)、ディプロマ・プログラム(DP;17・18才)などがあります。

平成27年5月現在、世界140以上の国・地域、4,145校(日本の中学校・高校では12校)で実施されています。その教育内容は、考える力やコミュニケーション力を養うことに重点を置いたカリキュラムで、創作活動やスポーツ、ボランティア活動にも力を入れた全人教育です。DPでは、授業の言語は英語や仏語などでしたが、2015年から日本語も認められています。また、最終年に行われる認定試験の結果によってIBの卒業資格が授与され、その資格を活用した大学入試の導入が、国内外の大学で実施されています。国内大学では、東京大学、京都大学、大阪大学、慶應義塾大学、早稲田大学など40大学で決定若しくは予定されています。

札幌市立札幌開成中等教育学校のIB授業風景

本県でのIB認定校への取組

このような国や大学の動きを踏まえて、本県の子どもたちの可能性を伸ばすために、高知西高校と高知南中高を統合して、2018年度に開校する新たな中高一貫教育校で、高校2年生からDPを実施できるように公立高校では中四国初となるIB認定校を目指します。授業の言語は、基本的には日本語ですが、英語による授業も行い、生徒に課題解決能力やコミュニケーションを図るための英語力を身に付けます。また、DPで学習した生徒は、IBの卒業資格を活用して、国内の難関大学や海外大学を目指すことができます。このような環境で育った生徒は、将来、グローバル人材として、高知県内外で活躍できると考えています。

高知県グローバル教育シンポジウムのお知らせ

IBに関する国の諮問委員会の委員である東京大学教授の長谷川壽一先生の基調講演や、文部科学省の松木秀彰氏の講演の後、「国際的な視野をもって地域や国際社会で活躍できる人材を育てるには(仮)」をテーマとしたパネルディスカッションを開催します。進行役にIBアジア太平洋地区理事の坪谷ニュウエル郁子氏を迎え、パネリストは先述の2名に加え、日立製作所の田宮直彦氏やIB校の卒業生をお招きしています。

- 日時　平成27年11月29日(日)　13:00〜16:30
- 場所　高新RKCホール(高知新聞放送会館西館6F)
  収容人員670人
- 対象　保護者、教育関係者等、入場無料、申込不要

【お問合せ先】
高知県教育委員会事務局高等学校課再編振興室
担当:阿野田、高野
TEL:088-821-4542
E-mail:311701@ken.pref.kochi.lg.jp

青年海外協力隊発足50周年を迎えて

青年海外協力隊事業は1965年に創設し、40名の隊員を5ヵ国に派遣したことから始まり今年で50周年を迎えました。今では88ヵ国に年間1500名を派遣する規模に成長し、その後は女性の参加率も年々拡大、1998年以降は女性隊員の人数が男性隊員を上回る状況です。これまでに派遣したJICAボランティアは累計で4万7千人を超え、高知県からも累計250名を超える方々がJICAボランティアに参加されました。

このページでは、帰国後も地元で活躍する元協力隊員4名の方々に協力隊時代の様々な思いを綴っていただきましたので、ご紹介いたします。

37年前の協力隊時代を振り返って

塹江　まほ さん
（高知県立農業大学校　野菜科主任）

派遣国：ガーナ　職種：理数科教師
派遣期間：1978年～1980年

私が理数科を教えた西アフリカ・ガーナ アクシムのセカンダリースクールは、日本の中学校と高校が一緒になった学校でした。

生徒は全員寮生活、先生方も全員学校の敷地内に宿舎を借りて住んでいました。私もアメリカ人の数学の先生と一緒に宿舎に住んでいました。日本からガーナに行って、最初にびっくりしたのは、広く立派な宿舎の中で、電気はつかず、水道の蛇口から水が朝２時間しかでなかったことです。しかし、後に、朝２時間使用できることは大変ラッキーなことであることを知り、「私って甘かった。」と反省しました。

環境は厳しかったですが、生徒達は本当に明るく、夢を持って勉強していたことが印象に残っています。一緒に行った私達全員ガーナが大好きです。

ガーナで教育委員会による研修

シリアに残してきたもの

前田　紗織 さん（オンライン日本語教師）
派遣国：シリア　職種：日本語教師
派遣期間：2005年～2007年

「先生は、授業中日本語だけを話しました。早くて全然分からなくて、学校をやめようと思いました。でも、続けていると段々分かるようになり授業が楽しくなりました。先生ありがとう。」

美しいヒジャーブをした学生が、帰国する私にこう言いました。私が日本語だけで授業を行うのは、中学での苦い経験からです。日本語での文法説明ばかりの授業、英語嫌いになるのに時間はかかりませんでした。

せっかく遠く日本から来ているのだから、たっぷり日本語のシャワーを浴びて、日本語を体で感じてほしい。

一方で、毎日日本語ばかり話す私のアラビア語はなかなか上達しなかったけれど、それでも、市場で買い物する時、タクシーのおじさんと世間話をする時、シリアの普通の人々は優しく接してくれました。

帰国の時、もっと語学力があったらもっと深い話ができるのになぁと思うけれど、自分の仕事はきっと果たせている、そう信じてその国を後にするのです。

博物館の前で近くの小学生と

高知県青年海外協力隊OB会での活動

原田　浩多 さん
（高知市立昭和小学校教諭）
派遣国：モロッコ　職種：小学校教諭
派遣期間：2009年～2011年

僕が派遣前に、OB会主催の壮行会でOBさんに話しかけてもらい、派遣の不安が解消されたことを覚えています。よさこいを現地の子どもたちに教えるための鳴子やお正月には日本食などを送ってもらい、派遣中も励まされました。そして、僕も帰国後はOB会に入って現役隊員のサポートをしたいと思い、現在はOB会会長を務めています。

OB会は、現役隊員の支援だけではなく、協力隊を広く知ってもらうための活動もしています。募集説明会、国際ふれあい広場、土佐のおきゃくなどに出展して、任国料理や飲み物を振舞いながら、現役隊員の活動を紹介したり、自身の体験を話したり、協力隊の応募相談をしています。

生まれ育ったこの高知から一人でも多くの若者に協力隊に参加してもらって、世界を元気にし、帰国後は高知を元気にしてもらいたいと願っています。

モロッコの先生と体育の授業

協力隊経験を活かして地元を盛り上げる

猪野　孔太 さん（道の駅 大杉）
派遣国：南アフリカ　職種：電気・電子設備
派遣期間：2011年～2013年

「過疎化が止まらない故郷の一助になりたい。」

元々、協力隊経験を地元に還元するつもりで参加しました。参加して特に感じた事は草の根目線で問題を見る事の大切さです。配属先の職業訓練校は実際には技術が卒業レベルに達していなくても卒業させてしまうケースがあり、内部から現場を見て発見した問題でした。

その問題の解決に向けて同僚と一緒に授業改善に取り組んできた事が今の自信に繋がっています。帰郷して今の職場に就いたのも、町の現状を草の根の現場で見るためです。

地元の人、観光客と接し、地域の活動や行事等に積極的に入る中で町の現状が見えてきます。その中で町内の若者の交流が少ない事が過疎進行の一因になっていると思い、現在は町の青年団の復活に注力しています。町の発展のために、協力隊で学んだ事を存分に発揮していきたいです。

授業にて電線のはがし方を実演

2015年度JICAボランティア秋募集　（募集期間10月1日～11月2日）

青年海外協力隊
日系社会青年ボランティア

シニア海外ボランティア
日系社会シニア・ボランティア

あなたの技術・経験を開発途上国で生かしてみませんか？
現地の人々と協働しながら、人づくり、国づくりに協力する「世界に笑顔をひろげるシゴト」です。

説明会情報【参加無料、申し込み不要、入退室自由】

時　9月26日（土）
13時～16時半　（青年/シニア共に）
所　高知県立県民文化ホール 第6多目的室
※オススメ企画：語学の不安解消! 応募に必須のTOEIC330点突破講座

時　10月10日（土）
13時～17時　（青年/シニア共に）
所　イオンモール高知 2階 イオンホール
※オススメ企画：インド映画「聖者の食卓」無料上映会同時開催!

【問い合わせ先】　独立行政法人国際協力機構（JICA）四国支部
TEL 087-821-8824（代表）
アドレス jicaskic@jica.go.jp

A Letter From Abroad

フィジー共和国からの便り

青年海外協力隊員（栄養士）　森　温子

フィジーに赴任7ヶ月、早くも任期の1/4が経過しました。私は現在、国家食糧栄養センター（National Food and Nutrition Centre）という保健省管轄のセンターで青年海外協力隊員・栄養士としてNCD（Non Communicable Disease：非感染性疾患、日本でいう生活習慣病）予防対策に取り組んでいます。国家食糧栄養センターは、国民の食生活・栄養問題に取り組む機関として1982年に設立され、フィジー国民の健康を強化するために、フィジーの食品・栄養状況の定期的なモニタリングと評価を行い、根拠に基づいた方針を作成します。2014年には10年に一度の国家栄養調査が実施され、その結果をもとに、国として政策の見直しや新たな立案が必要であり、具体的な取り組み内容の提案や実施が求められています。

フィジーを含む大洋州諸国では近年、NCDが問題となっており、フィジーでは特に肥満による高血圧や糖尿病疾患が深刻な問題です。

フィジーの人々は朗らかで明るく親切です。フィジー系6割弱、インド系4割弱、その他の人種が同じ国で生活しており、言葉も文化も宗教もさまざま、もちろん食事もフィジー料理、インド料理とあり中華料理もよく食べられています。

フィジーの方と一緒に食事をすると、その量の多さ、特に主食の量に目を奪われます。新鮮な野菜が手に入りやすい環境ですが、野菜の摂取量は必要量を下回っており、バランスのとれた食生活改善指導が求められています。

フィジー料理
（タロイモやキャッサバ、魚、鶏肉カレー、豆カレー、タロイモの葉のココナッツクリーム煮など）

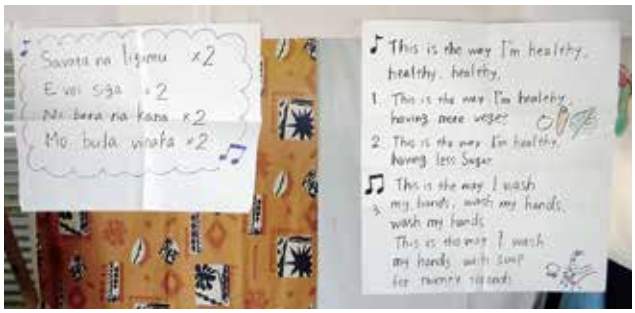
写真は、フィジーの食事です。この写真は私用の量ですが、フィジーの方々はこの2倍も3倍も多い量をお皿に盛っています。

飲み物に入れる砂糖の量がとても多いことも問題です。配属先で1杯のお茶もしくはコーヒーに使用する砂糖の量を調べたところ、平均小さじ5杯（25g）という驚くべき結果でした。また、家庭での食事、外食ともに食塩、油脂の使用が多く、インスタントラーメンや食パン、ツナ缶など安価で簡単に食べることのできる食材を利用する傾向も見られ、NCDを招く原因となっていると感じます。

任地のスバは、フィジーの首都であり、街中はビルが並び、交通量が多く車や人々が行き交います。徒歩よりもバスやタクシーでの移動を好み、運動不足の成人が多く、肥満を招く一つの要因であると考えられます。都市と村での生活には格差があり、近代的な生活をしている人がいる一方、村ではほぼ自給自足の生活をしている人もいます。村で出会った人々が「お金はないけど私たちは毎日幸せ」と笑って話されていたのが印象的です。

健康や栄養に興味を持っている人はいますが、人によってその知識に差があり、正しい知識の普及が必要であると感じます。私の活動はまだまだこれから、現地の新鮮な食材を活かし伝統料理や文化を尊重しながら、人々が健康で幸せな生活が送れるようサポートしていきたいです。

子供たちが描いた野菜の絵を使って野菜摂取の大切さを伝えるアクティビティーを実施



フィジーの人々は音楽が大好き! 手洗いや野菜・果物摂取を呼びかけるための歌。フィジー語（左）と英語（右）で歌詩を考えました

多言語減災プロジェクト in 高知
Multilingual Disaster Mitigation Project in Kochi

高知県立大学教員　長澤　紀美子・神原　咲子・Hyeon Ju Lee

高知県立大学では、外国人留学生らを対象にした防災研修会など、減災に向けた取り組みを行っています。その中で、国際災害看護学の神原准教授は、外国人集住都市において、過去に外国人が災害弱者となりえた3つの障害（バリア）を挙げています。研究の結果、①情報のコンテンツ（やさしい日本語やイラスト・写真等によるわかりやすい情報や、地図情報による病院や避難所等の提示）、②情報へのアクセス（災害時だけでなく日頃からアクセスしやすい、紙だけでなく電子媒体によるタイムリーな情報）、③災害時に情報を発信し、伝えあう双方向的サポートシステムの欠如が課題であったことから、高知においても高知県国際交流協会、南国市国際交流協会、高知県文化生活部国際交流課等の協力を得て、2013年から「多文化共生社会の災害情報に対するバリアフリーモデルの構築」に関する災害看護の研究を行い、外国人を災害弱者にさせないためにどのような支援が必要か検討してきました。そして、研究で明らかとなった課題を解決するために、現在、13xborders.（代表・岡本沙耶佳）が開発中のiPhone対応の「Anytime!」を用いて、それを高知で試験的に活用した試みが「多言語減災プロジェクトin高知」です。

人は日頃から使い慣れている情報源でなければ、災害時にも活用しません。「Anytime!」は、日本に住む外国人が、災害時はもとより、異なる文化的背景を持つことによる日常的な相談や悩みに多言語（日本語・英語等）で助け合うコミュニケーションツールです（図１）。そこでプロジェクトでは、今年のGWの約2週間に、Facebook上で「Anytime!」をインストールして活用するイベントを立ち上げ、留学生やJETプログラム教員等の高知在住外国人に周知しました。その結果、実施したエリア、時期、インターネット環境へのアクセス、iPhoneユーザーと助けを必要とする人の確保などのバリアがあった一方で、記事にリーチした人数は最大で296人であり、学内外からプロジェクトへの関心が高いことが示されました。今後は、コミュニティに住んでいる人も他から高知へやってきた人も、互いに状況に応じて助け合えるような情報伝達手段の開発や減災のための多文化共生社会の基盤づくりに関わる更なる研究を継続していく予定です。また、この夏、アップルストアにおいて「Anytime!」もリリースされました。

このプロジェクトにご協力頂いた皆様にこの場を借りて感謝を申し上げます。

INFORMATION BOARD

2015年度高知県海外技術研修員のご紹介

当協会では、高知県からの委託を受け、高知県研修員受入事業(※)を行っています。今年度は、ブラジル、パラグアイ、アルゼンチンから各1名の研修員が6月に来高し、来年3月までそれぞれの研修先で研修に励みます。

技術研修にとどまらず、県内視察や学校訪問などを通して研修員と県民のみなさんが交流できる機会を持っていきたいと考えています。

(※)本事業は、高知県が、中南米諸国や友好交流国の国民の中から研修員として適切と認められる者を受け入れ、必要な技術や知識を修得させ研修員の属する国の発展に寄与するとともに、県民等との交流を通じて友好親善を深め県の国際化に貢献できる人材を養成することを目的としています。

県文化生活部長表敬訪問での記念撮影。右から川上カミーラさん(ブラジル出身、高知広告センターで宣伝広告を研修)、黒原美生さん(パラグアイ出身、高知理容美容専門学校及びHairstyling Studios Vivaceで美容技術を研修)、淡中エセキエルさん(アルゼンチン出身、高知県農業技術センターで花き栽培技術を研修)

「国際ふれあい広場2015」を開催します!

■主催:公益財団法人高知県国際交流協会
JICA四国(独立行政法人国際協力機構四国支部)

■日時:10月18日(日)10:00～16:00
(※飲食販売は売切次第終了)

■会場:ひろめ市場よさこい広場、大橋通商店街

主な内容:

- 外国料理の販売
- 海外民芸品の販売
- JICAボランティア相談受付&体験談トーク
- 県出身の海外ボランティアの紹介
- 国際協力・国際交流パネル写真展
- その他、アジアの音楽・ハワイの踊り、等

★主催団体以外の出展団体紹介(順不同)★
①奥村多喜衛協会 ②高知県青年海外協力隊OB会 ③高知大学医学部アジア・僻地医療を支援する会 ④デルタ・カッパ・ガンマ・ソサエティー・インターナショナル日本支部 ⑤高知SGG善意通訳クラブ ⑥特定非営利活動法人Brain ⑦高知県フラ協会 ⑧オイスカ高知県推進協議会 ⑨高知県国際交流課 ※各団体の催物内容は当協会HPで確認できます。

昨年の様子▶
(JICAボランティア相談コーナー)

世界を知ろう! 異文化理解講座開催のご案内

当協会では、県国際交流員や留学生等を講師に迎え、外国の多様な文化や習慣などを紹介する「異文化理解講座」を年2回(6・7月及び11・12月)開催しています。次回講座は高知市を飛び出して、四万十市と安芸市で行います。外国について新たな発見がきっとあるはず!お誘い合わせの上、ぜひご参加ください。

なお、詳細につきましては、10月中旬頃に当協会HPにてご案内予定です。

7月の中国講座では、▶
太極拳について学びました

公益財団法人高知県国際交流協会　〒780-0870　高知県高知市本町4-1-37
TEL:088-875-0022　FAX:088-875-4929　HP:http://www.kochi-kia.or.jp/　e-mail:info_kia@kochi-kia.or.jp